

〈研究主題〉 主体的に学びに向かう姿を育てる授業づくり
～教師による子どもの「見取り」に焦点を当てて（2年次／2年計画）～

12月5日、本校と総合教育センター講堂を会場に、令和6年度公開研究会を開催しました。研究会には県内特別支援学校等から30名を超える先生方に御参加いただきました。

提示授業では、各学部において「児童生徒の主体的に学びに向かう姿を育てる授業」を提示しました。また、分科会では、御参加の皆様を交え、「見取り」に基づくそれぞれの「解釈」について対話を通して聴き合いながら「次につながるキーワード」を導き出す研究協議を行いました。

講演では、金沢星稜大学柳川公三子氏から『なぜ、子どもの「内面」を見取るのか？－「令和の日本型学校教育」の構築を目指して－』のテーマの下、教育現場における「内面の見取り」や「授業改善」の重要性、また令和の日本型学校教育に求められる学びの在り方について御講演いただきました。本号では講演について紹介します。



1 今、求められる授業とは？

現代の学校教育は、社会の変化に伴い大きな転換を求められている。AIやビッグデータの進展、新型コロナウイルスの影響などにより、社会は予測困難な時代へと移行した。このような背景から、学校教育は「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通じて、生徒が自分の可能性を認識し、他者を尊重し、協働しながら課題を乗り越える力を育むことが重要とされている。その中で、学習者自身が主体的に考え、学び合うことを中心に据えた授業改善が求められている。特に、ICT活用を含む新しい教育手法が不可欠となり、これらの実現が授業研究の柱となっている。

2 今、求められる「内面の見取り」

「内面の見取り」とは、児童生徒一人一人の成長や学びの過程を深く理解し、適切に支援するために必要不可欠である。従来の画一的な教育の限界が顕著になる中で、生徒が自己調整し、自ら課題を見つけて解決できる力を育む必要がある。これは、子どもの内面の成長過程や学びのつまずきを捉え、それに応じた柔軟な指導を行うことによって実現される。また、学びを「指導されるもの」から「自ら作り出すもの」へと変える視点が求められている。この見取りの視点は、教育の質を向上させる上で重要なものである。

3 「協働的な学び」を通じた授業者自身の「個別最適な学び」

授業者自身もまた、児童生徒との協働的な学びを通じて成長していくことが求められている。他校の事例では、生徒たちが地域の農園と協力してバナナマフィンの製造販売に取り組む中で、主体的に課題を見つけ、意欲的に改善を重ねていった。このプロセスで生徒たちは、地域社会との関わりを深め、多様な価値観に触れる中で自己肯定感や意欲を育んだ。同時に、授業者も生徒の成長を見取り、共に学ぶ中で自らの教育実践を深めることができた。こうした事例は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の相乗効果を示しており、教育現場全体で共有すべき重要な視点と言える。

これら3点を通じ、教育の根幹にある「学び続ける力」を児童生徒だけでなく、授業者自身も実践し、教育の質を向上させていくことが求められている。

※各学部の提示授業については次号以降で紹介します。